

水道の修理を頼んだら、自慰してるところを見られて、そのまま舐め尽くされた話。

連日、暑い。ニュースでは「命の危険がある」とまで言われる猛暑が続いている。今日も三十七度を超えるという。窓の外は、陽炎でゆらゆらと見えな
いほどだ。

在宅ワークの日だから助かった。

そう思っていた。冷たい麦茶を飲んで、涼しい部屋で仕事。通勤しなくていいのだから、もう十分満足するはずだった。

でも、実際はそういうわけにもいかなかった。

「……嘘だろ」

昼過ぎ、ノートパソコンを叩いていた俺は、キッチンから聞こえる異音に、ふと顔を上げた。ぽたり、ぽたり、と、水滴の落ちる音。

嫌な予感がして立ち上がる。キッチンに向かうと、シンクの下から、じわり、と水が滲み出していた。

慌てて扉を開ける。給水管の継ぎ目のあたりから、水がぽたぽたと垂れ、床の受け皿にはもう、うっすらと水が溜まっていた。

バケツをあてがってみるけれど、根本的な解決にはならない。放っておいたら、床が腐る。下の階に漏れたら、大惨事だ。

「……最悪」

俺は仕事の手を止めて、慌てて管理会社に電話をかけた。事情を説明すると、提携している水道業者から人を回してくれるという。

「本日中でお願いできますか？ 床が、水浸しになりそうで……」

『はい、業者のほうから折り返しお電話させますね』

五分もしないうちに、電話が鳴った。落ち着いた、低めの男の声だった。

『お世話になっております。水道修理の心海と申します。給水管の水漏れということで、伺います』

「あ、はい、そうです。キッチンの、シンク下から……」

『了解しました。三十分ほどで到着します。それまで、元栓を締めていただけますか。場所は——』

簡潔で、丁寧で、無駄がない声だった。指示通りに元栓を締める。ぽたぽたという音が、ぴたりと止んだ。

少しほっとして、俺は寝室に戻った。冷房の効いた寝室は、リビングよりずっと涼しい。汗ばんだシャツを脱いで、ハンガーにかける。上半身裸のまま、ベッドの縁に腰を下ろした。

どうせ業者が来るまで、三十分もある。少し、汗を引かせよう。

しばらくして、インターホンが鳴った。思ったより早い。

『心海です。水道修理に伺いました』

慌ててシャツを羽織り直し、玄関に向かう。モニター越しに映る男は、想像していた「水道屋のおじさん」とは全く違った。

背が高い。おそらく百八十を超えている。切れ長の目に、細く通った鼻筋。ネイビーの作業着をきっちり着込んで、工具箱を片手に提げている。年齢は、二十後半だろうか。

玄関を開けた瞬間、外の熱気と一緒に、彼の低い声が飛び込んでくる。

「こんにちは。心海です。ご連絡いただいた水漏れの件で伺いました」

綺麗な人だった。

彼はすっと頭を下げた。無駄のない、けれど礼儀正しい所作。目元は涼しげで、笑顔らしい笑顔はない。ただ、口の端がわずかに上がっているだけ。それが妙に、大人っぽく見えた。

「あ、初めまして。小林巡です。よろしくお願いし

ます」

「はい」

（背、たっか……。しかも、なんか……。色っぽい人だな）

自分より確実に年上の男に、なぜだかドキッとしてしまった自分に狼狽える。ぱっと目を逸らして、彼をキッチンに案内した。

心海さんはシンク下を覗き込み、懐中電灯を当て、指先で継ぎ目を確認めて、「ああ」と何かに納得したように呟いた。

「パッキンの劣化ですね。あと、ナットも少し緩んです。部品交換すれば済む話ですが……。ちょっと奥まってるんで、時間かかりますよ」

「そう、なんですか」

「一時間、いや、少し余裕をみて、一時間半ほどいただけますか。作業中、水を止めますから、涼しい部屋で待っていてください。寝室は冷房、効いていますよね？」

「あ、はい、効いてます」

「では、そちらにいてください。呼ぶ必要があれば、声をかけます」

落ち着いた、低い声。命令ではないのに、なぜか従わなければならない気がする声だった。俺は素直に頷いて、寝室に向かった。

ドアを閉めると、ひんやりした空気が肌を撫でた。全身から力が抜けて、ふらりとベッドの縁に腰を下ろす。羽織り直したシャツの前を開けて、パタパタと風を送る。冷房の風が胸元に入り込んで、汗ばんだ肌をひやりと撫でていく。

(……心海さん、格好よかったな)

男が好きな俺の頭の中は、すっかり心海さんでいっぱいだった。

切れ長の目。低い声。作業着越しにも、鍛えられているのがわかる、しっかりした肩幅と、長い脚。それでいて、指先の動きが、繊細だった。パッキン